時評

# 「勤めなきさかひを恋ひて」（上田三四二）考

植山俊宏

通勤には電車を利用している。気が重い日、軽い日、思いがあちこちへ巡る日、何事も気にとまらない日などさまざまである。

「勤めなきさかひを恋ひて」。この詩句に出合ってからもう四十年が経とうとしている。上田三四二『短歌一生』（昭和六十二年刊（初出「短歌研究」昭和四十五年））にこの上二句だけ示されていた。「勤め」のない「境」地を恋焦がれる思いを抱く人がいるのだ。職を得て一年目の私にはこの願望が理解できなかった。こんなことを臆面もなく、言葉にする三四二に呆れつつ、敬う気持ちも生まれてきた。勤めから離れる時期が来たなら、こんな思いを深くすることができるのだろうか。この時、私は、余命宣告を受けた三四二の、この詩句に寄せた意味に気づくことができなかった。

三四二はその稿から二十年ほどして逝った。享年六十五。私はほぼ同年齢になり、この言葉を見返している。というより、四十年頭を去ることのなかった未完の一節を誦しつつ、今立ち止まっているのである。自分がいつのまにか短歌の世界に身を置くことになったことも含めて、この一節の理解と決着を図っている。

三四二に倣って、自分なりの希求の一節はないものかとの思いが強くなっている。歌人たる者、理想の一節、一境地を持ちたいと願うのは当たり前だろう。私には、まだ「勤め」があり、「つとめなきさかひ」を「恋」うほどの短歌的な悟りを得るに至っていない。ただ、「勤め」への思いを減じながら、短歌への意欲を膨らませるようにしている。創作や歌会の他に、古歌の学習や近在の宇治川や井手の玉川、志賀などの歌枕の探訪を増やしてきた。

私の祖母は、「創作」の同人であり、偶然にも大悟法利雄の教え子（小学生時）であった。教職、子育て、孫の面倒が一段落ついた五十代から短歌を作り始め、『金婚』という歌集一冊を残して八十歳で世を去った。逝去直前の見舞いの折に、がんばって短歌を作ったらどうだと声をかけた。驚いたことに「もうインスピレーションが湧かん」との強い言葉が返ってきた。そのとき祖母という人間の創作者としての終焉を知った。祖母なりの、老後の務めなき「さかひをこひ」て、貫いた最後の姿だったのだろう。

「勤めなきさかひを恋ひて」は、職、務めの実際を指してはいない。短歌を詠ずる精神、境地のことを表している。「恋ひて」追う先には、創作という自己修練の積み重ねで得られる精神の楽しさ、強さ、広さ、豊かさがあると考えたい。創作と「勤め」「務め」は、対立的な関係にない。精神の比重の問題である。「さかひ」とは、自分の内に風を起こし、水を流し、水量を増やしていく努力、精進を重ねてたどりつくものと言えないだろうか。その着地点を私の「短歌一生」の考えとしたいと願っている。

なお、『上田三四二全歌集』で確認するかぎり、「勤めなきさかひを恋ひて」は、上二句のまま未完に終わったようである。